

# 日本赤十字秋田短期大学の小児看護学実習の実態と課題

山本捷子<sup>1)</sup> 大高恵美<sup>2)</sup> 奥山朝子<sup>3)</sup>

## Plan and Analysis of the Pediatric Nursing Clinical Practice in Japanese Red Cross Junior College of Akita

Shoko YAMAMOTO Emi OOTAKA Asako OKUYAMA

**要旨：**小児との接触経験が少ないという現代学生の条件と、実習施設の制約にあわせて、本学の小児看護学実習は公立保育所10ヶ所と2つの総合病院で行っている。特性の異なる2つの病院で行うため、学生の学習経験の差がなく、効果的な学習ができるような実習計画と指導の工夫が必要である。実習前に学生のレディネス調査を行い、実習後にも学習した受持症例の種類や人数、看護技術の体験、学生の子どもの関係の変化について調査し、分析評価した。看護学科1期生の結果では、受持患児は1～2名で、急性期疾患が多く、小児の生活の援助はほぼ経験している。学生は子どもに好意的な感情をもち、人間関係もとれている。しかし子どもとの接触経験の少ない学生は好意的関係が成立しにくいので、指導援助が必要である。

**キーワード：**小児看護学実習、子どもとの接触経験、小児看護技術の経験  
看護学生の子どもに対する思い

**Summary :** Although the nurse students in this college, lack in experience of associating with children, they had to be carried out the practical training of pediatric nursing under the very condition of the pediatric in 10 public day nurseries and 2 general hospitals.

For the first-term students of the nursing course looked after 1 - 2 children, chiefly with acute diseases , and they could bear toward the children in the nurseries and hospitals.

The result obtained from the analyse of the research articles showed that student nurses who lacked in experiences with children tend to have difficulties in dealing with children, and they need teacher's instruction and support more than ever.

**Keywords :** Analysis of the Pediatric Nursing Clinical Practice

Clinical Practice of Pediatric Nursing

Experience Nursing skills of Nurse student

Nurse students' Experience associating with Children.

Feeling of nurse student toward children

### はじめに

臨床看護実習は、経験学習として、看護を学ぶ上では必要不可欠な学習方法である。現代の看護学生は核家族化や同胞数の減少化を反映して、生育歴や日常生活の中で子どもと接触する経験は少ない。子どもとその保護者を対象とする小児看護では、学習の主体者である学生の条件に合わせて、さらに学習環境の制約にあわせて、効果的な実習

計画を展開する必要がある。

本学は平成8年に開学したが、小児看護学実習を計画する段階において、少子化時代と秋田という地域の特性から、実習施設数などの学習環境の制約があることが予測されていた。そこで、小児接触体験の少ない学生であることを前提として、保育所と病院実習を組み合わせ、より効果的な実習を目指して、実習を計画し実施してきた。

本稿では実習計画を紹介するとともに、平成10年1月から12月までに行った1期生の実習の実態について分析し、今後の課題を考察したので報告する。

特に開始前より危惧された学生の実習体験については、受け持って学習した症例、看護技術、学生の子どものとの関係に絞って検討した結果を分析考察した。

## Ⅰ. 実習の概要

臨床実習という実際場面での学習は、看護の対象（小児看護学では小児とその保護者）に対する理解を深め、看護実践のあり方を学習する機会である。

本学の小児看護学実習は次のような実習要項の下に展開している。

### 1. 実習目的・目標

本学の看護学科の教育目標に準じて、小児看護学のねらいは「小児看護実践の為の基礎的能力の育成」としている。

1期生の実習目的は「子どもと子どもをとりまく環境を対象とした看護のあり方を理解し、小児看護の実践に必要な基礎的能力を養う」とした。

その為の実習目標を以下のように設定した。

#### 【実習目標】

- 1) 子どもが活動している場面を通して、子どもの発達の特徴を理解する。
- 2) 子どもとの信頼関係の必要性を理解し、保育的な関わり方を学ぶ。
- 3) 健康および発達上の問題をもつ子どもの実態とその生活環境を、現実的な経験を通して理解する。
- 4) 健康上の問題を持つ子どもと保護者に対して、初歩的レベルで看護援助を行うことができる。
- 5) 学内学習と実習経験を統合して、自己の小児看護観を明確にする。

### 2. 実習展開の方法

実習目標を達成するために次のような方法で、実習を展開した。

#### 1) 期間・実習時間

本学のカリキュラムでは、実習1単位は45時間（1週間）で、小児看護学実習は3単位（3週間）である。1期生80名は、3週間を1クールとして、

平成10年1月から12月の間に8クール、5名を1グループとして16グループ編成し、成人・老人看護学、母性看護学、小児看護学の規定の実習単位数を全員がクリアできるようにローテイトした。

#### 2) 実習場所と学生数

小児看護学実習では1クールに2グループ（10名）の学生が実習した。実習スケジュールは、第1週目は保育所実習、第2・第3週目は病院実習とした。保育所実習は秋田市立の10保育所に依頼し、1クールの実習では5つの保育所に各2名を配置した。

病院実習は、秋田赤十字病院（以下「A病院」と略す）小児科病棟と本荘市にある由利組合総合病院（以下「B病院」）小児病棟に依頼した。各病院の特徴を勘案して、学生数はA病院に3～4名、B病院に7～6名を配置した。

#### 3) 指導体制

保育所実習の指導は、週の途中で教員が1回訪問し状況把握と重点事項について質疑応答しながら指導した。そして第1週の金曜日に学内で合同カンファレンスを行った。

病院実習では、実習時間中は各病院に1名（講師と助手）の専任教員が病棟に駐在して、指導に当たった。臨床側の指導者はA病院では看護係長が、B病院では専任の臨床指導者であった。教授は週1回は病棟に出向き、受持患児と学生の状況把握、カンファレンスに参加し助言した。また実習評価は専任教員が面接しながら、評価表を用いて評価し、教授が最終評価を行い、履修認定をした。

### 3. 実習の成果

#### 1) 学習成果

実習目標にそって評価してみると、個人差はあるが、総体的に見て、アセスメント（情報収集）は表面的で、科学的分析が弱いのか看護計画は顕在的問題に集中しやすい。実践の段階では、ほとんどの学生が子どもと、よい関係を成立させることができた。しかし母親や祖母、などの付き添い者とは、援助的関係までは至らなかった。実践した看護技術の種類は少ない。（詳細は後述する）

総括のレポートでは、看護過程は実習経過が進むごとに、大体満足できるところまで展開できるようになり、小児看護学を通して学んでほしいと

重点目標にしている「子どもと望ましい関係形成」や「療養生活における遊びの重要性」「子どもと保護者を一体とした小児看護」については、ほとんど把握できており、全体的に実習目標はほぼ達成している。

## 2) 実習成績

実習成績は、学生の7割が80～85点を中心としたA評価（80～100点）であった。欠席も少なく、全員履修認定できた。

## II. 小児看護学実習の学習結果と課題

小児看護学実習を展開するに当たり、2つの病院での学習内容の差異を少なくし実習効果をあげる為に、実習前後に必ず学生のレディネスや看護技術に関する調査を行った。その結果を分析評価して、指導課題を明らかに次年度から改善するための資料とした。ここではその一部を述べる。

### 1. 学生の受持患児の特徴と課題

#### 1) 実習病院の特性

A病院は平成10年6月までは市街に所在したベッド数457床の総合病院だが、小児科病棟は11床で産科に併設していた。同年7月に本学に隣接して新築移転したが、小児科病棟は11床で整形外科、形成外科39床との混合病棟である。

B病院は、平成6年に近代的に改築された750床の総合病院で、小児病棟は未熟児4床を含み外科・整形外科など全科の子どもを受け入れているが、10年秋から眼科12床が併合された。B病院の所在地は、ほとんどの学生の居住地より電車や車で1時間半以上はかかる所であるため、通学には不便である。

#### 2) 受持患児の疾患の種類

実習目標を達成するために、学生は患児1人を受持ち、個別性のある看護を学習した。受持った患児の総数は131人であった。

疾患の種類は表1に示すように、小児に多い疾患で多岐にわたっているが、受持ち患児の約半数は呼吸器系疾患であった。

呼吸器系疾患の中でも、インフルエンザ・気管支炎・仮性クループ・喘息が多く、入院時には急性症状が強いが、点滴・吸入と安静で回復も早く4、5日で退院する。

表1 受持患児の疾患一覧 (n=131)

	病 名	A病	B病	合計
呼吸器系	インフルエンザ	3	14	57
	気管支喘息	2	8	
	喘息様気管支炎	3	4	
	気管支炎	4	2	
	肺炎	2	4	
	仮性クループ	2	4	
	急性扁桃腺炎	1	1	
	急性咽頭気管支炎	0	1	
	急性咽頭炎	0	1	
神経系	ヘルパンギーナ	0	1	29
	無菌性髄膜炎	3	8	
	乳幼児てんかん性脳症	4	1	
	熱性けいれん	0	6	
	点頭てんかん	1	0	
	てんかん（疑）	0	1	
	もやもや病	0	1	
	脳梗塞	0	1	
	意識障害	0	1	
消化器	ヘルペス脳炎	0	1	13
	小児神経症	1	0	
	急性胃腸炎	3	5	
	急性虫垂炎	0	4	
泌尿器系	急性腸炎	1	0	10
	慢性肝炎	2	1	
	ネフローゼ症候群	1	1	
	腎機能障害	0	2	
先天性	急性糸球体腎炎	0	1	5
	腎静脈血栓症	0	1	
	紫斑病性腎炎	0	1	
	神経因性膀胱	0	1	
伝染系	口唇口蓋裂	4	0	5
	流行性耳下腺炎	0	2	
	水痘	0	1	
	ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群	0	1	
筋運動	溶連菌感染症	0	1	3
	骨折	0	2	
膠原病	股関節炎	1	0	3
	若年性関節リウマチ	0	2	
その他	全身性エリテマトーデス	0	1	6
	口唇腫瘍	0	1	
	頸部腫瘍（疑）	0	1	
	真珠腫	0	1	
	低身長	1	0	
	川崎病	0	1	
特発性血小板減少性紫斑病		0	1	
合 計（人数）		39	92	131

\*2 疾患以上の場合は主要疾患のみ記載（単位：人数）

その他の学生が多く受け持つ無菌性髄膜炎、熱性痙攣、急性腸炎も、同様に急性で入院期間も短い。入院期間がやや長期になる腎疾患や白血病や骨肉腫、心疾患や先天性疾患は経験しない。

両病院で症例の種類は大きな差はない。これは、どちらも地域における治療主体の総合病院のためである。

### 3) 受持患児の数と年齢層

80人の学生が受持った患児の人数は総計131人、平均1.7人であった。

実習期間内に1人の患児を継続して受け持つことができた学生は15人19%と少なく、65人81%が2人以上の患児を受け持った。(表2)

表2 学生の受持患児数 (n=80)

施設 受持数	A病院	B病院	合計
1人	6	9	15
2人以上	19	46	65

(単位: 人数)

受持った患児の年齢層は、幼児前期(1~3歳)と幼児後期(4~6歳)がほぼ同数で27%、ついで学童期(7~12歳)と乳児もほぼ同数であった。(表3)

表3 受持患児の年齢 (n=131)

施設 受持数	A病院	B病院	合計 (%)
乳児期 (0歳)	12	13	25 (19)
幼児前期 (1~3歳)	8	28	36 (27)
幼児後期 (4~6歳)	12	22	34 (26)
学童期 (7~12歳)	6	24	30 (23)
思春期 (13歳~)	1	5	6 (5)
合計数	39	92	131

この理由は、前述したように入院患児は急性期の疾患で、治療主体の病院という特性によるものである。B病院には、院内学級として養護学校の分校が併設されているため、学童期の患児を受け持つことがやや多い傾向がある。

### 4) 受持症例に関する問題

経験学習という実習では、学習の機会を多く準備することは重要である。そのため1グループの

学生に、できるだけ年齢層や健康レベルの違う患児を受け持たせるように工夫した。しかし、季節によっては、ほとんどの患児がインフルエンザで、急性腸炎や熱性痙攣を併発している乳幼児になってしまう時もあった。

学習環境の制約がある中で学習効果を高めるには、受持ちや接触(見学)の少ない疾患・症例について、どのように学内で補充するかが課題であった。そのために、実習最終日に学内で合同カンファレンスを行い、両病院で実習した体験の違いを報告しあい、教員が学習のポイントを補足説明し、知識の共有と補充をはかった。その成果は把握していないが、次年度からは「小児臨床看護」の授業で、小児看護で多く出会う症例、言い換えれば国家試験に出題されやすい小児の代表的な症例を、事例演習で学習するように配慮した。

## 2. 小児看護技術の習得の実態と課題

小児看護学実習における看護技術については、受持ち患児に必要なケアは学生ができるだけ実施すること、できるだけ数多く体験(見学だけでも)すること、高い熟達レベルは望まないが、原理原則をおさえて安全・正確にできることを期待している。

病院実習では、どのような看護技術を経験したかどうかをチェックした。(図1)

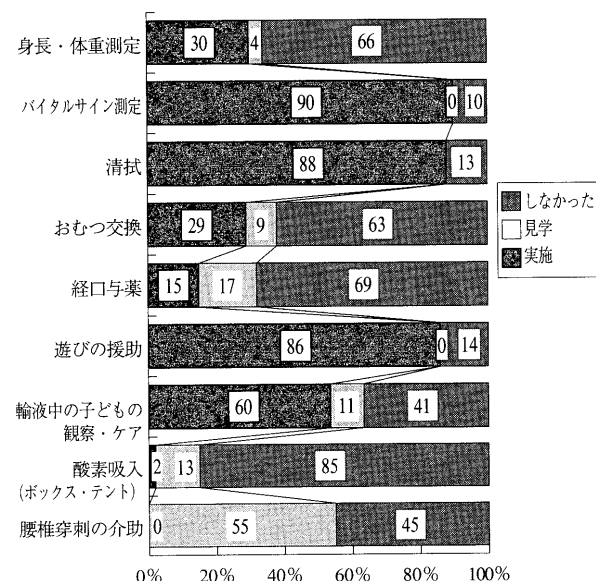


図1 小児看護技術の経験度 (n=80)

バイタルサインの測定や清拭、遊びの援助については約90%が実施しているが、輸液管理は観

察程度であった。腰椎穿刺は、約半数の学生が見学しているが、機会があれば見学させ、カンファレンスで取り上げて、検査時のケアとして学習させている。

しかし、身体計測、酸素吸入や検査などの診療技術、日常生活の中のおむつ交換、経口与薬を経験した者は少なかった。

A・B両病院の地域的特性から、入院患児は難病や高度な医療が行われる症例は少なく、小児医療に特有な診療技術の学習は見学の機会も少ない。しかし、小児援助の基本として重要な技術である身体計測や食事介助や経口与薬を体験していないことは問題と考えられる。

この理由には、ほとんど全ての乳幼児に付き添いがついているため、生活援助や経口与薬が付き添い者に任されているという状況がある。また学生も「母親が実施した方が子どもに苦痛を与えない」と考える傾向が強く、学生自身が自分の技術が未熟である故に消極的になっている。しかし、自分が実施したいという学生自身の意欲がなければ、数少ない経験の機会を逃してしまう。

指導教員は、学生と付き添い者と患児の三者に働きかけ、患児に苦痛を与えず実施する方法のモデルを示したり、学生の意欲を鼓舞して、積極的に経験する機会を与えることが必要である。

実習中に経験できる機会の少ない項目については、学内の授業で演習やデモンストレーション、VTR視聴など、工夫する必要がある。

### 3. 学生の子どもに対する感情の変化と指導課題

小児看護の対象である子ども、しかも急性期の症状が強く不機嫌な患児、また病状も刻々と変化していく患児、さらに付き添い者がいる場合などは、患児との関わりが上手にできるかどうかは実習目標達成度と同時に、学生の実習意欲に影響する。そこで、実習前と後に学生の子どもとの接触経験の有無、小児看護実習と子どもに対する感情(気持・思い)に関してレディネス調査を行った。

#### 1) 接触経験の有無と実習や子どもに対する不安

子どもとの接触経験のある学生は56名で、3分の2は甥や姪、ボランティアで、あるいは直前の母性看護学実習で接触している。

小児看護学実習の前は、「不安・心配」をもつ学生が半数の39人(49%)と多く、「楽しみ」と答えた学生は17人2割でしかない。

子どもとの接触経験が「有る」学生でも24名42%が「実習が不安・心配」であるが、接触経験が「無い」学生のうち75%が不安・心配の感情を持っていた。(図2)

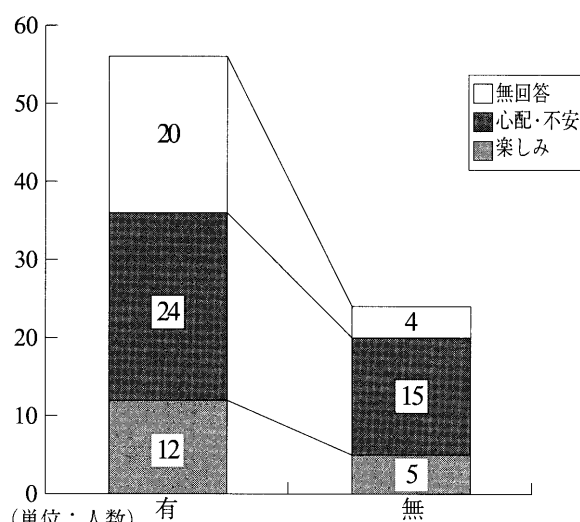


図2 「子どもとの接触経験の有無」と「小児看護学実習に対する学生の気持ち」との関係(n=80)

「小児看護学実習で何が不安・心配か」という具体的な内容については、子どもとの接触経験のある学生は、「接し方が苦手」と答えた学生が多く、これは過去の子どもとの接触経験が影響して不安を招いているのではないかと考えられる。

また、接触経験のない学生は「遊び方がわからない」「子どもへの関わり方がわからない」「接し方が不安」等が多く、接触経験の無いことそのものが不安・心配をもたらしている。いづれにしても経験のない学生には、具体的な関わり方の指導援助が必要であることを示唆している。

学習効果を上げるための指導課題としては、レディネス調査で「不安・心配がある」学生に対しては、教員は比較的病状が安定し、言語によるコミュニケーションのとれるような子どもを受持ち患者に選び、学生が子どもに関わる際には、傍にいて見守り、また一緒に関わって、関わり方のモデルを示すことである。

#### 2) 実習前と後の学生の感情の変化

実習前に「不安・心配がある」学生39人のうち、実習後に「子どもと関わる際の不安がなくなった」「子どもとの接し方がわかった」という学生は32人となり、不安は軽減している。

## 3) 子どもに対する学生の「思い」の変化

看護学生の「子どもに対する思い」を、可愛い・好き・無邪気などを「好意的関係性」、嫌い、うるさい、邪魔なものを「非好意的関係性」、可愛いが苦手、生意気だが素直などを「両価的关系性」と命名した分類(表4)を用いて、実習前後でどのように変化したかを分析した。

表4 「私にとっての子どもとは」の分類

分類	内容
好意的関係性	かわいい 好き 無邪気 素直 愛らしい 欲しい 育てたい 守られる存在
両価的关系性	かわいいけど苦手 生意気だが素直 無邪気だが何を考えているかわからない存在
非好意的関係性	嫌い うるさい 邪魔なもの 扱い難い 苦手

引用文献：東則子「現代における青年の小児との接触経験が子ども観に与える影響について」

実習前の学生の子どもに対する思いは、図3に示すように、49名61%の学生が「好意的」であった。「両価的」を示した学生は22名28%、「非好意的」を示した学生は9名11%であった。

実習後の変化では「好意的」が66名83%に増えている。

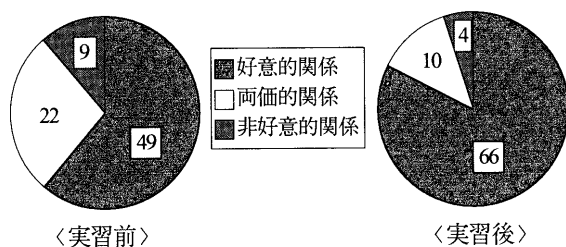


図3 学生の子どもに対する感情の変化 (n=80)

実習後に「非好意的感情」の者が4名いる。その内訳は、「非好意的」のままだが1名の他、実習前は「好意的」から実習後に「非好意的」になった者が1名、実習前の「両価的」から実習後に「非好意的」になった者2名である。言い換えればプラスイメージがマイナスイメージに変容したことは注目すべきことである。

この要因を個別的に実習記録からみると、受持患児が急変して重症になった乳児、不機嫌で

人見知りが激しく抵抗する幼児、心身症で反応の少ない幼児であった。これらの患児は、看護者の働きかけ自体が難しく、また学生を受け入れないため人間関係を成立させることが困難な症例であった。学生の個人的な性格、能力や人格の成熟度も関係すると考えられるが、具体的に確認していないため根拠は不明である。

この結果からの指導課題としては、受持患児の反応に対して学生の関わり方や、その時の学生の感情を捉えながら、よい関係ができていくように援助することは勿論である。その他にも、レディネス調査で「非好意的」「両価的」を示した学生に対しては、特に受け持ち患児の選び方、病初期の不機嫌なこどもとの間に立って、学生の感情を安定させ、適切な関わり方を助言援助することが大切である。

## おわりに

本学の小児看護学実習の計画と実施結果をまとめることによって、少子化と医療経済の圧迫という社会的状況の中での小児医療のもとで、学生のレディネスに対応して、効果的に小児看護学実習を展開させるためには、実習施設の選択、実習指導体制や指導方法、学内における先行学習などにさまざまな工夫、配慮が必要であることが明確になった。

2期生の実習も終わろうとしている現在、この評価と2期生の指導評価を再度検討して、さらによりよい小児看護学の教育を展開したいと考えている。そして、学生が子どもの看護を学ぶだけでなく、自分自身の中の「子ども性」から脱皮し、よりよい成人に成長して、次代を背負う子どもたちを健康に産み育てる人になるように、今後とも努力し、指導していきたい。

## 【引用文献】

- 1) 東則子：現代における青年の小児との接触体験が子ども観に与える影響について—看護学生の子ども観を中心に、神奈川県立平塚看護専門学校紀要第2号, pp30-44, 1995.

## 【参考文献】

- 1) 佐藤奈子他：看護系大学に億載る小児看護学の実習の実態と今後の展望, クオリティナッシング Vol. 4, No. 8, pp.49-54, 1998.
- 2) 山本捷子：小児看護実習における小児に対する学

- 生の認識の変容について：学生の実習経過の分析から，日本赤十字中央女子短期大学研究紀要第2号，pp.11-18，1981.
- 3) 山本捷子：小児看護実習における学生の子ども観の変容に関する一考察，日本赤十字中央女子短期大学研究紀要第3号，pp.30-37，1982.
- 4) 田淵和子・山本捷子：看護学生の子どもに対する認識や態度に変化を及ぼす実習の影響，日本赤十字中央女子短期大学研究紀要第5号，pp.47-55，1984.
- 5) 植木野裕美：本学学生の子どもに対する接触体験と関心度・認識の状況（第2報）－家族変動と教育課程に焦点を当てた前回との比較検討，第20回日本看護学会看護教育，pp.70-7，1989.